In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	「明応二年御陣図」からみた中世後期の河内国
Author	三原 大史
Citation	都市文化研究. 23 巻, p.167-181.
Issue Date	2021-03
ISSN	1348-3293
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科 ： 都市文化研究センター
Description	研究資料
DOI	10.24544/ocu.20210421-003

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

都市文化研究 第23号 2021年3月 167-181頁
Studies in Urban Cultures Vol. 23, March 2021 pp. 167-181

◇研究資料◇

「明応二年御陣図」からみた中世後期の河内国

三　原　大　史

◆要　旨

本稿では「明応二年御陣図」（以下「御陣図」と略記）に関する検討を行った。「御陣図」とは，奈良市福智院家に伝来し，現在は京都市在住の個人が所蔵する絵図である。この絵図は明応2年（1493）に起きた河内国守護の畠山氏の内紛，正覚寺の戦いについて描写したものであり，中世河内国の聚落・川・道などを描いた貴重な史料として知られている。また，絵図の作成者は興福寺大乗院門跡の尋尊であると伝えられている。

こうした背景のある「御陣図」について，絵図中の文字，すなわち地名を翻刻した上で，その地名と交通路について現地比定を行った。多くの地名については，翻刻と現在地とを比定することができた。加えて，これまで橋と考えられていた長方形の記号は，渡し場や渡舟の可能性が想定されることを指摘した。

検討の結果，「御陣図」は尋尊に近しい人物が作成した可能性が高く，正覚寺の戦いのみならず，これまでの畠山氏の内紛に関する情報が含まれているなど，いくつかの新知見が得られた。

キーワード：「明応二年御陣図」，河内国，畠山氏，正覚寺の戦い，交通路

はじめに

本稿では，中世後期の河内国を描いた「明応二年御陣図」について検討する[1]。まずはこの絵図がどういった背景で描かれたのか概観してみよう。

中世後期の河内国は，畠山氏が代々守護をつとめたが，15世紀中葉になると家督を争う内紛が発生し，約100年にわたりこの抗争が続いた。元々家督争いを行っていたのは，畠山持国の子である畠山義就と持国の甥である畠山政長であったが，義就が没した後も，その子である基家と政長の対立が続いた。

明応2年（1493），政長方が河内国の基家方拠点（誉田・高屋）を攻めた。この戦いの最中，京都では明応の政変が起こり，政長方として出陣していた室町幕府10代将軍足利義材が廃され，新将軍義澄が擁立されるという一大事件が発生した。当初戦いを優位に進めていた義材・政長方であったが，明応の政変をうけて状況は一変し，結局，正覚寺の戦いで政長が討たれ，基家方の勝利でこの戦いは幕を閉じた。なお，本稿では煩雑を避けるため，明応2年におきたこの一連の戦いを正覚寺の戦いという表記で統一する。

この正覚寺の戦いの布陣状況を描いたとされているのが「明応二年御陣図」である（以下「御陣図」と略記する）。

「御陣図」は興福寺大乗院の坊門である福智院家に伝わる文書群の中に含まれていた絵図であり，現在は京都市在住の個人が所有しており，花園大学による調査によってその存在が明らかとなった[2]。その調査報告によると，「御陣図」は「四百〇弐年ニナル　将軍義稙河内ノ軍　明応二年御陣ノ図　尋尊僧正筆」という記載のある罫紙に包まれて伝来したとのことである。加えて，花園大学によって次のような補注が付されているので，以下引用しておく。

> 尋尊僧正筆とする根拠は確認しえないが、おそらくはその筆跡によって推断されたものであろう。ともあれ、明応二年の足利義稙（義材・義尹）の河内方面への進出時をさほど降らぬ時期に、大和・河内方面の地理に明るい人の手で描かれたものとみて大過はあるまい。とすると一国、二国の広域にわたる古地図としては史料的にも珍らしいものではなかろうか。因みに、尋尊描くところの地図の一例は、刊本『大乗院寺社雑事記』第八巻口絵写真四にもみえている。

この発見をうけて，その後「御陣図」は自治体史類で広く紹介されるようになった[3]。1981年に刊行された『大阪府史 第四巻』の巻頭には，写真が掲載されるとともに，「御陣図」内に書かれている文字が翻刻されている。また，正覚寺の戦いの経過の概略については後述するが，この戦いで主戦場となったのは，現

在の羽曳野市・藤井寺市を中心としたいわゆる南河内地域であり，当該地域の『羽曳野市史』の史料編にもトレース図が掲載されている。

このように，大阪府下の自治体史類において，「御陣図」は中世河内国を描いた貴重な絵図資料として取り扱われている。さらに，各都道府県の歴史地名に関する情報を網羅的に掲載する日本歴史地名大系の『大阪府の地名』Ⅰ・Ⅱ（以下『地名大系』と略記する）においても，「御陣図」に記されている地名が紹介されている。

ここで「御陣図」の特徴をまとめておくと，地名を示す文字，川・道を示す線を組み合わせて描かれている。仁木宏氏は，距離はもとより正確ではないとしながらも，地名（聚落）相互の位置関係はわずかな例外をのぞき，かなり正確であると評している[4]。

「御陣図」に記された地名の位置関係については 2 章で詳述するが，筆者もこの見解に賛同する。したがって，さらに詳しく位置関係を検討することで，「御陣図」は中世後期の河内国に関する研究に活用できるものと考えている。

ところが，この「御陣図」に関する個別具体的な検討はあまり行われていないように思われる。まず，「御陣図」に記されている文字の翻刻は，先述の通り『大阪府史』や『羽曳野市史』などで行われているが，その見解には異なる部分が存在するほか，ともに翻刻が不十分な箇所も見られる。また，その文字が示す地名の現地比定についてはまとまった研究が行われていない。先のトレース図では，その地名が現在のどこに相当するのか不明である。仁木氏は「御陣図」の現地比定作業を試みているが[5]，その研究の主眼は現地比定作業ではないので，一部比定が行われていないなどの課題が残されている。さらに，「御陣図」にみられる交通路（川・道）についての検討は，これまで自明のものとして，細かな検討がなされていないように思われる。『大阪府史』などに掲載された「御陣図」は白黒写真であったが，最近『新版八尾市史』古代中世編でカラー写真が掲載されたことによって，これまで気付かれていなかった詳細も見えやすくなった。

そこで本稿では，「御陣図」に記された文字の翻刻，地名の現地比定および位置関係の検討，川と道を示していると考えられる黒線と朱線の比定を試みる。翻刻では筆者自身の見解を提示し，現地比定では先述の『地名大系』に拠りながら，その記述に疑問がある点については筆者なりに考察する。さらに，「御陣図」において最も複雑難解なのは，川・道といった交通路である。翻刻及び現地比定をもとに，中世後期の河内国における交通路について若干の考察を試みたいと思う。

1 章　正覚寺の戦い前後の経過

本章では，「御陣図」の検討を行う前提として，正覚寺の戦いの経過を概観する。特に，義材・政長方が京都を進発して以降の経過は，「御陣図」とも深く関わるので，同時代の日記類，特に『尋尊大僧正記』を参照しながら，各合戦における布陣状況に注意して述べることとする[6]。

(1) 畠山氏の家督争いと足利義材

まずは室町期に河内国守護をつとめた畠山氏の内紛と，正覚寺の戦い前後の足利将軍家の動向についてまとめておく。

畠山氏が河内国守護に初めて任じられたのは永徳 2 年（1382）のことである。この時，守護に任じられた畠山基国は，応永 5 年（1398）に幕府管領となり，これ以後，細川氏・斯波氏とともにその職をつとめることとなった。

基国が河内国守護に任じられて以降，畠山氏は代々その職を世襲したが，15 世紀中葉になると，その内部で家督を争う内紛が勃発する。特に畠山持国の子である義就と持国の甥にあたる政長との抗争は長きにわたり，これが応仁・文明の乱を引き起こした一要因であったことは周知の通りである。

畠山氏の内紛は，応仁・文明の乱終結後も継続した。政長と対立していた義就は延徳 2 年（1490）に没したが，義就の子である基家も政長と対立し続け，正覚寺の戦いにつながっていった。

次に，この頃の室町幕府における将軍の状況をみておく。文明 5 年（1473）に足利義政の子である足利義尚が幼少ながら 9 代将軍に就いた。その後，義尚は応仁・文明の乱により低下した将軍権威の回復などを目指し，長享元年（1487）に自ら近江国の六角高頼討伐の軍をあげた。しかし，高頼をなかなか討つことができずにいた義尚は延徳元年に近江国鈎の陣で没した。

これを受けて，義尚の将軍職を継いだのは足利義材である。義材は義政の弟義視の子であり，当時父の義視とともに美濃国にいたが，義尚の死をうけて上洛し，延徳 2 年に 10 代将軍に就任した。義材は前将軍義尚の意志を継ぎ，六角高頼討伐に出陣して成果を収めた。高頼は伊勢国に逃亡し，義材は新たな近江国守護を任じて延徳 4 年に帰京している。

翌明応 2 年（1493），河内国守護であった畠山政長は，河内国を実力支配していた畠山基家を討伐する目的で，義材に河内国への出陣を要請した。これを了承した義材は，自ら軍勢を率いて今度は河内国へ遠征す

ることとなった。

しかし，将軍義材の出陣は，裏を返せば将軍の京都不在ということでもあった。そして，この時出陣しなかった細川政元らはこれを好機ととらえ，義材を廃位して新将軍義澄の擁立を行った。いわゆる明応の政変である。畠山氏の内紛が将軍の交代という重大事件の引き金となったのであった。

では，節を改めて，正覚寺の戦いと明応の政変の経過について述べることとする。

(2) 正覚寺の戦い

明応2年2月15日，足利義材・畠山政長らの軍勢は，政長と葉室光忠を先陣に，斯波義寛や細川義春などが後陣として連なり京都を進発した。この日は八幡まで軍勢を進め，義材は善法律寺，政長は牧，武田元信と斯波義寛は薪，赤松政則は山崎に陣を取っている[7]。

同月24日，義材は河内国橘嶋正覚寺に軍勢を進めて陣を敷いた。正覚寺は元々政長の陣所であり，『尋尊大僧正記』には「敵方畠山次郎基家之高屋城、誉田与其間三里也」と記されている[8]。義材・政長方が拠点とした正覚寺と基家方が拠点とした誉田城や高屋城との距離が12kmほど離れていると記述されているが，これは現在の距離とも整合する。また，26日には少々合戦があったようで，義材・政長方の斎藤氏が藤井寺に打ち入ったということである[9]。

これ以後，義材・政長方が何度か基家方の拠点近辺まで攻め入ったようである。3月15日の記事には，「明日誉田之藤井ニ可有御動座之由、及其沙汰者也」と記されており[10]，義材自身が軍勢を率いて積極的に合戦に関与していたことがうかがえる。

一方，この時期，葉室光忠は大和国の衆徒で基家方につく越智氏や古市氏に対して，「両畠山和与」[11]および「両陣和与」[12]について相談をもちかけている。しかし，この提案は結局，受け入れられなかった。

3月23日，葉室光忠が藤井寺に出陣するとともに，義材方によって「雪宮城」が攻め落とされて城衆4人が亡くなったと『尋尊大僧正記』は記している[13]。さらに26日にも合戦があったようで，基家方の拠点である誉田城や道明寺が焼けたとのことである[14]。『尋尊大僧正記』では，この時の記述が一部抹消されているが，抹消部分によると，誉田城が焼けたことに伴って「高野(屋)城江引入」とある。なお，『大乗院日記目録』や『蔭涼軒日録』によると，この時の合戦は高屋城の西側であったと記されている[15]。『尋尊大僧正記』とこれらでは，合戦の位置が少し異なるが，ともあれ，基家方の拠点である誉田城・高屋城の近辺まで義材・政長軍が攻め込んだことは間違いない。

ところで，『尋尊大僧正記』4月1日条には，この時期の各軍勢の布陣場所が以下のように列記されている[16]。なお，〈　〉は割注であることを示す。

屋形(畠山政長)勧学寺〈正覚寺近辺、〉　尾張守(畠山尚順)〈大田若林、五十丁、〉　遊佐(長直)藤井寺〈十八丁、〉　済(斎)藤・紀州衆藤井寺ノ西野陣　武衛(斯波義寛)コウ(国府)〈五十丁、〉　大内(政弘)天王寺　赤松(政則)南庄〈屋形ハ出口云々、〉次郎カンメキ(亀井)〈五十丁、〉

一　尾張守手ニハ越中衆・安藝・石見衆
　武田　八尾

一　春円大申、泉州シワ(塩)穴城責洛〈誉田方者也、〉
　武田ハコウ　遊佐藤井　同尾張守野トウ(遠)・野々瀬ノ陣
　大内ハタンケ(丹下)

一　（三月十五日説）畠山尾張守ハユキノ宮ヘ取陣、堺東也、向ノ東也云々、

「御陣図」に記された地名については2章で検討するが，ここには「御陣図」にもみられる地名が多く記されている。『尋尊大僧正記』と「御陣図」の親近性を看取できる。

(3) 明応の政変と義材・政長の敗北

正覚寺の戦いは，足利義材・畠山政長方が優位に合戦を進めていたようにみえた。しかし，『尋尊大僧正記』3月21日条に「昨日勢州(伊勢貞宗)代官三上下向越智(家栄)方、鏡現院殿可成新将軍之由申云々、越智・古市(澄胤)喜悦無是非云々」とあるように[17]，京都ではいわゆる明応の政変の準備が整いつつあった。「鏡現院」と記されている人物は，室町幕府11代将軍となる足利義澄のことであり，当時天龍寺香厳院にいた清晃のことである。すなわち，3月20日時点で大和国の越智家栄・古市澄胤に義材の廃位と義澄の擁立が伝えられていた。

そして4月22日，将軍の交替という事件が起きた。これにより，これまで優位に戦いを進めていた義材・政長方と，基家方との立場は一気に逆転することとなった。

25日には武田元信・斯波義寛・細川尚春が陣を引いて堺に至り，「京方」に転じたほか，28日には細川義春と赤松政則が誉田城に入っており[18]，これまで義材・政長方についていた諸大名は続々と離反していった。さらに，閏4月となり細川元治・上原元秀・安富元家といった細川政元方の武将たちが義材・政長討伐のために河内国へと進発していった。

閏4月6日・7日，義材方が押さえていた藤井寺が落ち，義材と政長，そして政長の子である畠山尚順は正覚寺に引き退いた[19]。これ以後，彼らは政長家臣の

遊佐長直らも含めて，正覚寺に「一所」した[20]。

その後，閏 4 月 19 日に義材・政長方の斎藤氏が紀州より根来衆を率いて来たため，正覚寺南口に構えていた基家方の誉田氏はその軍勢の元へ向かっている[21]。攻め込んできた紀州勢は，21 日に堺近辺で赤松政則の軍勢と合戦に及び，赤松方が紀州勢の大半を打ち取っている[22]。

同じころ，細川政元より派遣された上原元秀の軍勢は，天王寺から正覚寺の西に移って合戦に及び，その後「天王寺木村邊」に戻りそこにとどまるという行動をとっている[23]。なお，元秀は閏 4 月 22 日に基家から河内十七ケ所を拝領している[24]。

閏 4 月 25 日，ついに義材・政長方の拠点である正覚寺が落ちた。結局，政長は自害，尚順は没落，遊佐長直は討ち死に，そして義材は葉室光忠とともに捕らえられ，その後京都へと送還された[25]。

この閏 4 月 25 日をもって，ひとまず正覚寺の戦いに終止符が打たれたと考えて良いだろう。

以上の一連の合戦をまとめると，義材・政長方は京都を出陣して河内国へ入ってから，正覚寺を主な拠点として積極的に基家方に攻め込んだ。特に藤井寺や古市など，現在の藤井寺市・羽曳野市・松原市に残る地名が史料上に多く登場することから，当該地域が主戦場となったことが読み取れる。「御陣図」でもこれらの地域について詳細に記されているので，「御陣図」が正覚寺の戦いを意識して作成されたということは間違いないだろう。

一方で，基家方は誉田城・高屋城を拠点に応戦した。明応の政変により，義材・政長方と基家方との形勢は逆転し，正覚寺において勝負が決したが，それまでの合戦においては正覚寺近辺で争われた状況はあまり確認できない。「御陣図」でも，上記の通り藤井寺市・羽曳野市・松原市に相当する地域が詳しく描かれているのに比して，正覚寺近辺の情報はそれほど詳しくない。したがって，同時代に記された日記類と「御陣図」の描いた状況は近似しているといえるだろう。

2 章 「御陣図」の地名検討

本章では「御陣図」に記された文字について検討する。先述の通り，「御陣図」は正覚寺の戦いの布陣状況を描いた絵図と考えられるため，絵図中の文字は合戦に関係する地名と想定できる。さらに言えば，城郭や構といった，軍事的な役割を担った土地を示していることが多いと考えられるだろう。

こうした絵図の性格を念頭に置きつつ，それぞれの地名の翻刻を行い，さらに現地比定作業を行う。なお，現地比定に際しては，『地名大系』をもとにしつつ，軍事的要素を踏まえて『図解　近畿の城郭』シリーズを参照した。なお，紙幅の都合から，「御陣図」に記されているすべての地名について文章にまとめることはできないので，翻刻・比定地・現在地などを表にまとめた。以下では，翻刻や比定地について見解が分かれるものなどを取り上げたので，これ以外の地名については表を参照されたい。

法通寺　「御陣図」において，「法通寺」は「イコマ」の西，「往生院」の東に位置している。これに従えば，「法通寺」の位置は現在の東大阪市六万寺町に相当すると思われる。

しかし，「法通寺」に関する記述が『尋尊大僧正記』にしばしば記されており，その中に法通寺庄の「在所ハ生狛(駒)山之鬼取山之西ウラ所々入紐(組)在之」となっている[26]。この「鬼取山」は現在の奈良県生駒市鬼取町辺りと考えて良いであろう。現在の鬼取町の西側は東大阪市石切付近である。

『地名大系』には，「石切剣箭神社北部に法通寺の字名が残る」と記載されている。この地は『尋尊大僧正記』に記された位置と比べて大差ない。その上，同地付近における発掘調査においても，法通寺の跡と考えられる遺構が検出されており，法通寺は現在の東大阪市石切付近に存在したことが判明している[27]。

一方で，「往生院」は石切剣箭神社よりも 4km ほど南に位置する。『尋尊大僧正記』の記述と発掘調査の成果をもとにすると，「往生院」の東側に「法通寺」が存在したとは考え難く，「御陣図」を描く際にその位置を誤ったものと考えられる。

矢尾・八尾　「御陣図」には「矢尾」と「八尾」が別の場所に書かれている。この両者について「御陣図」の位置関係から検討する。

「矢尾」は「勝軍寺」（大聖勝軍寺）の東，黒線と朱線を挟んで「教興寺」の西に位置している。その位置関係から推測すると，現在の八尾市南本町辺りに相当するように思われる。当地には矢作神社が鎮座しており，当社は物部氏に連なる矢作連の氏神とされており，石清水八幡宮の別宮であった。

ところで，この矢作神社は南北朝の動乱により社殿がことごとく焼失したと伝わっている。建武 4 年（延元 2 年，1337）10 月 5 日八尾城に籠城していた北朝方を南朝方が攻撃しているが，北朝方の土屋宗直の軍忠状に「去十月五日、東条凶徒等寄来八尾城、打巻四方、城内之堂舎・仏閣・矢蔵・役所等、以火矢殊被焼失」とある[28]。一方，南朝方に属した安満法橋了願なる僧侶は，軍忠状に「十月四日、於丹下城致合戦忠畢、同五日、押寄矢尾城南面城戸口、二ヶ度懸入、致合戦之

条、田宮大学助大夫、大隅左衛門尉令見知畢」と記しており[29]，先の「八尾城」と「矢尾城」が同一であることは明らかであろう。そして，了願が「矢」の字を使用しているところに，矢作神社との関連をうかがわせる。また『地名大系』には，土屋宗直軍忠状にみえる八尾「城内之堂舎・仏閣」を矢作神社と考える説もあると記述されている。

以上を踏まえて，筆者は「御陣図」の「矢尾」は矢作神社の事を指すのではないかと考える。

次に，「八尾」は「ウエ松」（植松）の東，「矢尾」の南に位置しており，現在の八尾市刑部辺りに相当するのではないだろうか。ただし，これ以上比定地を検討することは難しいので，ここでは現在地を八尾市刑部近辺とするにとどめておきたい。

以上，「矢尾」と「八尾」について考察した。比定地の一案は示せたが，根拠に乏しいため比定地を確定することはできない。

橘嶋正覚寺　正覚寺の戦いにおいて，義材・政長らが拠点とした正覚寺は，強調の意味からか，何重にも丸囲みがされている。記載の文字について，『大阪府史』は「屋形 御陣 正覚寺」とし，『羽曳野市史』は「屋形 御泊 正覚寺」としている。一方『大阪市史』は「御陣」「御泊」ではなく「橘嶋」としている。筆者も「橘嶋」が適切と考える。

先述したように，『尋尊大僧正記』では正覚寺について「橘嶋正覚寺」という表現がみられ[30]，この当時正覚寺一帯は橘嶋荘に含まれていたことが分かる。

カツタ　『大阪府史』と『大阪市史』は「カツマ」，『羽曳野市史』は「カツタ」と翻刻している。筆者は，「カツタ」と翻刻すべきと考える。ただし，「カツタ」という地名は見られず，仁木氏はこの地を住吉大社よりも北側にある「勝間」のことを指しており，その位置関係は不正確であると指摘している[31]。筆者もこの見解に同意する。近世の摂津国西成郡には勝間村が存在し，現在の大阪市西成区玉出や千本の地域に相当すると考えられる。

ナカウラ　『地名大系』に「ナカウラ」に相当する地名が見られないので，「御陣図」における位置関係から検討する。「ナカウラ」は「タンケ」の北，「守屋」の南という位置に示されている。この位置関係から，現在の大阪市平野区付近ではないかと推測する。そして，平野区には「長原」の地名があるので，「ナカウラ」は本来「ナカハラ」とすべき地名だったのではないかと考えられる。

当該地域では発掘調査によって中世から近世に至る集落の存在が確認されている（長原遺跡）。したがって，正覚寺の戦いの時期においても，この地は生活の場として利用され，聚落があったのではないだろうか。

アシロ　『大阪府史』・『羽曳野市史』・『大阪市史』はともに「アシロ」と翻刻している。筆者が確認した限りでも「アシロ」と読むのが適切ではないかと考える。

この「アシロ」に関係しそうな地域として挙げられるのは，河内国「足代荘」である。しかし，足代荘は現在の大阪市生野区巽および東大阪市足代辺りを領域とした荘園であり，「御陣図」の位置とは大きく異なる。したがって，「アシロ」を足代荘に比定することは難しい。

そこで，筆者は次の可能性を指摘しておく。すなわち，「アシロ」は「網代」を指すというものである。「網代」は魚網を打つべき場所，漁場など，漁業と関係する意味を有している。「御陣図」の「アシロ」は大阪湾沿いに位置しているので，この辺りは漁業が活発な地域と考えられるが，これをもって「アシロ」の位置を断定することはできない。とはいえ，「御陣図」における「アシロ」の位置は，摂津国住吉郡辺りである。したがって，ここでは現在の大阪市住吉区近辺にかつて存在した地名の可能性を指摘するにとどめる。

カン田　「御陣図」には，「アシロ」の南，「花田」の北に位置しており，「アシロ」同様摂津国住吉郡に相当すると思われる。当該地域には苅田の地名が残り，これは花田との位置関係も矛盾しない。よって，「カン田」は苅田のことを示していると考え，現在の大阪市住吉区苅田に比定したい。

片岡坂　『大阪府史』は「行者坂」，『羽曳野市史』・『大阪市史』は「片岡坂」としているが，筆者は「片岡坂」と考える。「片岡」は興福寺一条院方国民片岡氏の居城片岡城（奈良県北葛城郡上牧町）と考えられるが，「御陣図」の位置から香芝市今泉の送迎山城が適切だと思われる。片岡氏は送迎山城から片岡城に拠点を移したと考えられ，この当時は送迎山城を拠点としていたと考えられる。送迎山城への道を「片岡坂」と称したものと思われる。

光明寺　『地名大系』では，現在の南河内郡河南町大ヶ塚の浄土真宗興正派光明寺が載っているが，同寺は大永2年（1522）の開基であるから整合しない。また，現在の羽曳野市河原城にも浄土真宗本願寺派光明寺がみえるが「御陣図」の位置とは異なる。「光明寺」の比定地は，現段階では保留しておくこととする。

ノ　セ　『地名大系』において該当するような地名が見当たらないので，「御陣図」における位置関係から検討する。「ノセ」の近くに位置するのは「田井庄」であるが，これは現在の松原市田井城に比定できる。このことから，「ノセ」も松原市域の地名ではないか

と推測される。

現在の松原市には向井・高木・東代・清水・更池・堀地域の産土神を祭る布忍神社が存在する。これらの地域一帯はかつて布忍（ぬのせ）と呼ばれていた。したがって，「ノセ」とは「ヌノセ」の誤記ではないかと考えられ，当地に比定する。

ユキノミヤ　「ユキノミヤ」は，『尋尊大僧正記』に登場する「雪宮城」や「ユキノ宮」と同一と考えられる。先にみたように 3 月 23 日に義材・政長方によって攻め落とされており，この一連の戦いにおける重要な戦場の一つであったと思われる。

さて，この「ユキノミヤ」について，『大阪府史』では現在の八尾市弓削の由義宮に比定している[32]。ところが，「御陣図」における「ユキノミヤ」の位置は「タカヤ城」の西方であるから，『大阪府史』の見解については再考しなければならない。

『尋尊大僧正記』同様，正覚寺の戦いの経過について詳しい『蔭涼軒日録』に記された軍勢の布陣状況に「ユキノミヤ」がみられるので，以下に一部引用する[33]。

二日（前略）
河州御方諸軍勢書立、自御陣到来、
可有一覧云々、彼書立来、
陣取次第、（中略）、一　にし（西）の浦〈誉田より四町〉、斎藤六郎左衛門尉、一　ゆきのみや〈にしの浦のそば〉、根比（来）のせんしき（泉識坊）はう、きの（紀）国衆三千、（後略）

「西のうら」は，誉田から四丁という距離を踏まえると，現在の羽曳野市西浦と考えられる。「ゆきのみや」は西浦のすぐ近くと記されているので，やはり八尾市の由義宮に比定する見解は誤りと言わざるをえない。現在の羽曳野市域に比定するべきであろう。

次に九条政家の日記である『後法興院記』の記述を見みてみる[34]。

十一日乙亥（前略）
去六日ツヽ山、伊紀宮構等没落、七日夜藤井寺城破引退正覚寺城之由書状奥ニ被告示、

明応の政変後，義材・政長方は日に日に不利な状況になっていた様を先にみたが，この史料もその一場面

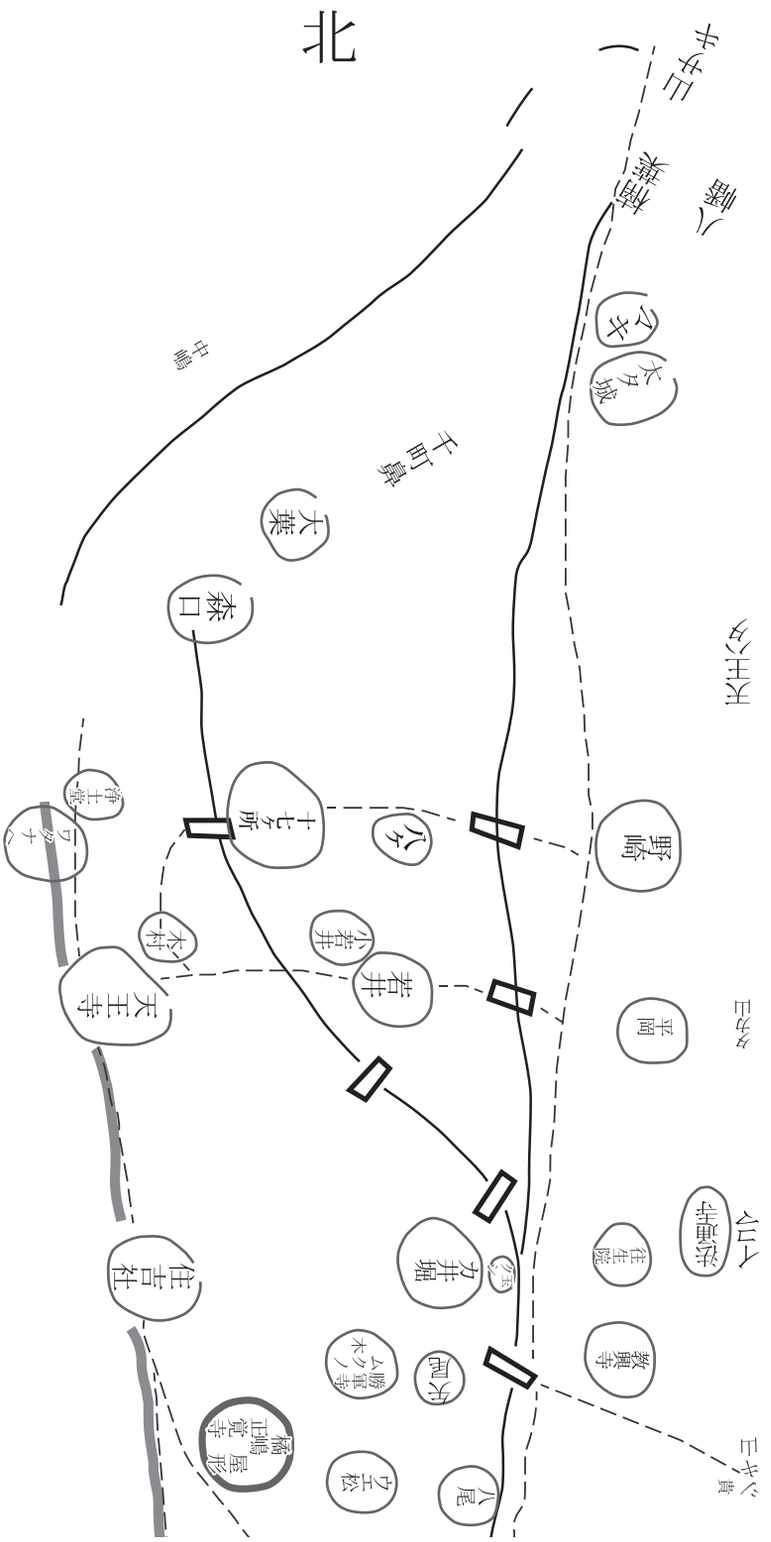


図 1 「明応二年御陣図」トレース図（北側）

について記したものである。ここにみえる「伊紀宮」こそ「ユキノミヤ」と考えられる。というのは，江戸時代に河内国志紀郡柏原村の三田浄久によってまとめられた『河内鑑名所記』巻二に次のような記述がみえるからである[35]。

○古市ニ雪の宮といふあり、また白鳥の宮ともい

ふなり、やまとたけ（る）の尊鷺になり飛給ひしと伝ふる、（後略）

この「白鳥の宮」は現在の羽曳野市古市にある白鳥神社のことを指している。そして，当社は「伊岐宮」と呼ばれ，社伝によれば寛永期に軽墓（現在の羽曳野市軽里，古市の西側に位置する聚落）の「伊岐谷」より移築したとのことである。

以上の検討より，「ユキノミヤ」はかつて伊岐谷に存在した伊岐宮（白鳥神社）のことを指し，それを合戦で使用したものと考えられる。当地は白鳥陵古墳や峯塚古墳などの古墳が多数存在する地域である。したがって，伊岐宮はこれら古墳の頂にあったものと推測される。

ムカ井　「御陣図」には「ムカ井 屋形」と記されているが，「屋形」は抹消されているように見える。『地名大系』を参照すると，「ムカ井」の候補地は次の二つが考えられる。一つは，現在の松原市北新町・東新町付近に存在した向井村であり，『地名大系』は当地を「ムカ井」と推測している。もう一つは，現在の羽曳野市向野などに存在した向野村である。『地名大系』に「村域北西端、東除川を北に渡ったところに字島城があり、中世の城跡と伝える」と記述されており，「屋形」すなわち政長がここに陣取っていた可能性を想定しうる。

ここで「ムカ井」の位置について整理すると，「ユキノミヤ」と「山」の西にあり，北の朱線は竹内街道である。向井村は先述の「ノセ」と同一の地域である。「御陣図」では「ノセ」と「ムカ井」は竹内街道を挟んで距離を置いて描かれている。したがって，実際の位置関係と矛盾している。一方，向野村は村内を竹内街道が通り，「ユキノミヤ」・「山」との位置関係において大きな差異はみられない。

したがって，「御陣図」の「ムカ井 屋形」は，「向野」のことを指していると考えられ，現在の羽曳野市向野などの地に比定したいと思う。この場合，詳細は不明だが，「屋形」は島城を示している可能性が考えられる。

高□　「御陣図」で「狛谷」（コマカタニ）の南に位置する当地は，『大阪府史』・『羽曳野市史』・『大阪市史』において「高□」とされており，二文字目の翻刻がなされていない。筆者も翻刻を試みたが，二文字目は確定できなかった。

そこで，周辺との位置関係からこの文字が何を示しているのか検討してみる。

「狛谷」は現在の羽曳野市駒ヶ谷に比定できる。そうすると，この「高□」は現在の羽曳野市大黒，あるいは羽曳野市および富田林市の地名として残っている通法寺あたりと想定される。ここで注目したいのが，羽曳野市大黒に「高麗（たかおかみ）神社」という神社が現存していることである。当社は「延喜式」神明帳に載る河内国石川郡「大祁於賀美神社」のこと

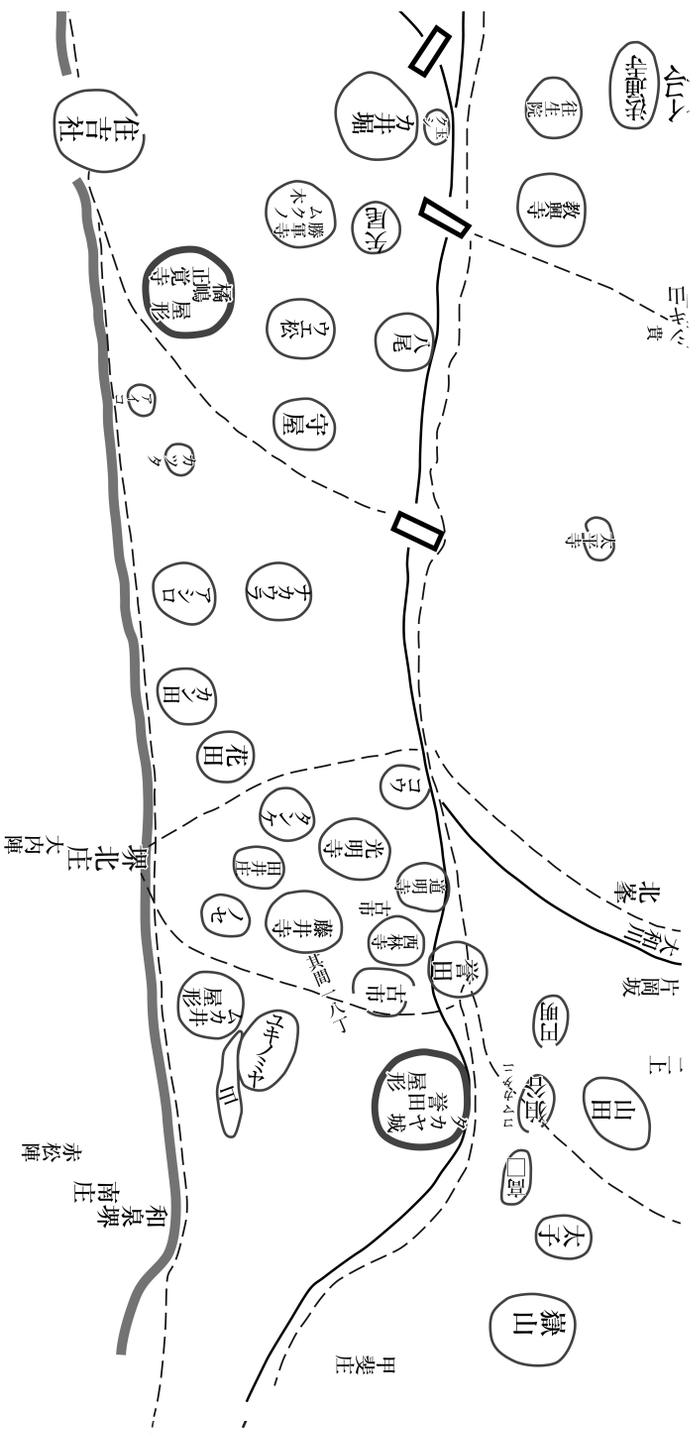


図 2 「明応二年御陣図」トレース図（南側）

である。現在は大黒寺の南裏手に鎮座しているが，かつては現在地よりも約 100m 南に位置していたとのことである。

確定させることはできないが，当地はこの「高靈」神社のことを記したものと推察され，筆者はこれを羽曳野市大黒にある高靈神社と比定する。

以上，「御陣図」に記された地名について翻刻およびその比定地を示した。一部確定できない部分もあるが，多くの地名についてはまとめることができた。

また，摂津国住吉郡近辺の地名について，そのほとんどがカタカナで記されていることに注意しておきたい。これは，これらの地域が正覚寺の戦いの主な合戦の舞台になっていなかったこと，それにともなって尋尊周辺に情報が十分に入ってきていなかったことを示すだろう。また，御陣図作成者がこの地域に明るくなかったことを物語っていると想定しておく。

3 章　河内国の交通路

前章では「御陣図」にみえる地名について検討し，その比定地を提示した。一部詳細が不明な地名，および比定地を確定するまでには至らない地名も存在したが，大部分の地名について現在地を示した。

本章では，この地名をもとにして，河内国の交通路について若干の検討を加えたいと思う。

「御陣図」には黒色の線と朱色の線が引かれており，これが交通路を示していると考えられる。河内国における河川および道を踏まえると，この黒線は川を示しており，朱線は道を示していると考えられる。ただし，「御陣図」の西側，「ワタナヘ」から「和泉堺南庄」まで引かれている黒線に相当する河川は存在しないので，これは海岸線を示しているものと思われる。

図 1 と図 2 は「御陣図」のトレース図であり，図 3 は現在地を比定するものである。いずれも実線は川，点線は道，太線は海岸線を示している。

(1) 黒線―川―

まずは黒線，すなわち川について検討していく。以下，図 3 の（ア)～(ク）に対応して記述していく。

淀川（ア）「山サキ」や「楠葉」の西から中嶋を通り「浄土堂」や「ワタナヘ」辺りまで引かれている黒線は淀川である。正覚寺の戦いに先立つ文明 15 年 8 月の畠山義就と畠山政長の抗争において，義就が千町鼻の西の大庭堤を切り落とす水攻めを行った。淀川中流域の地名として「大葉（大庭)」，「千町鼻」が記載されていることにも注意しておきたい。

寝屋川（イ）「マキ」から「野崎」の西にかけての黒線は寝屋川と思われる。当時の寝屋川は野崎の西に位置した深野池に流入していた。ただし，深野池は描写されていない。

石川（ウ）「甲斐庄」の西から「コウ」に至るまでの黒線は石川である。石川は現在の柏原市安堂付近で大和川と合流する。御陣図では石川が「誉田」の西側を流れているが，実際は東側を流れていた。また，石川に沿ってその東側に引かれている朱線は東高野街道と思われるが，実際には石川が東高野街道よりも東側を流れている。

大和川（エ）「大和川」から「コウ」に至る流れは大和川である。大和国から亀の瀬を経て河内国へ流入するこの川は，石川と合流したあと，幾筋かに分流し河内平野を北上する。

玉串川（オ）「コウ」から「玉クシ」と「カ井堀」に至る黒線は，旧大和川水系の一つである玉串川と考えられ，東高野街道の西側を北上する。現在の八尾市二俣で長瀬川と分流し，東大阪市稲葉で吉田川と菱江川に分流する。

吉田川（カ）「玉クシ」から「野崎」の西に至る黒線は玉串川から分流した吉田川と考えられる。この川は深野池に流入し，北から流入する寝屋川と合流する。その後両川は西進するが，「御陣図」にその流れは記されていない。

菱江川（キ）「玉クシ」から「若井」の南辺りまでの黒線は，玉串川から分流した菱江川と思われる。菱江川は北に流れ，新開池へと流入する。新開池も描写されていない。

長瀬川（ク）「若井」の南から「森口」に至る黒線は長瀬川と考えられる。先述の通り，本来の長瀬川は八尾市二俣で玉串川と分かれ，八尾市・東大阪市を北に抜けて大阪市城東区で寝屋川に流入する旧大和川水系の主流路である。

寝屋川（イ）と玉串川（オ）は同一の流れに見えるが，深野池の位置を考えると，このように分けて捉えるべきであろう。菱江川（キ）と長瀬川（ク）についても，同一の流れのように描かれているが，ここには「御陣図」作成者の理解の不十分さが見て取れる。すなわち，「玉クシ」近辺で分流する流れは東の吉田川と西の菱江川であるが，「若井」と「小若井」は菱江川よりも西に位置するので，この点を考慮すると，菱江川には当てはまらない。したがって，「御陣図」作成者は菱江川と長瀬川の流路について混同している可能性が高い。

(2) 朱線―道―

次に朱線で示された道について検討する。以下，図

3の（A)〜(J）に対応して記述していく。

東高野街道（A）「山サキ」から「甲斐庄」まで続く朱線は東高野街道である。東高野街道は生駒山の西麓を南北に縦断する河内国の主要交通路である。「山サキ（崎)」は淀川右岸にあるので，この部分の表現は不正確である。

熊野街道（B）「浄土堂」から「和泉堺南庄」に至る朱線は熊野街道である。この道は摂津国渡辺を起点に四天王寺や住吉社の近辺を通って南下する。

「十七ケ所」と「野崎」とを結ぶ道（C） 近世において，摂津国東成郡野江村・蒲生村の南から東進し，河内国茨田郡横堤村・諸口村・安田村辺りを通り，新開池北側と深野池南側を通り，中垣内村にいたる道に相当すると考えられる[36]。

暗峠越奈良街道（D）「天王寺」から「平岡」の西を結ぶこの道は，近世の暗峠越奈良街道の前身となる道と考えられる。「御陣図」には「平岡」より東の道が描かれていないので，15世紀末においてこの峠越のルートはあまり使われていなかった可能性もある。

京街道（E）「木村」から「十七ケ所」を結ぶこの道は，近世の大坂と京都を結ぶ京街道の前身と考えられる。

信貴越（F）「矢尾」から「シキ山」まで続くこの道は，教興寺を経て信貴山に通じる道である。

八尾街道・渋川道（G）「住吉社」から「太平寺」の西に至るこの道は，摂津国内については八尾街道，河内国内の道は渋川道であると考えられる。玉串川を跨ぐように描かれている長方形の四角は現在の柏原市古町辺りと推測される。

長尾街道（H）「堺北庄」から河内国の中央部を東西に横断し「コウ」に至るこの道は，長尾街道である。中世においては堺と河内を結ぶ主要な交通路であった。

龍田道（I）「コウ」から「北峯」を結ぶこの道は，大和国と河内国を結ぶ龍田道の一部と考えられる。

竹内街道（J）「堺北庄」から「誉田」の南を通り「狛谷」や「山田」の南へと通じるこの道は，南河内を東西に横断する竹内街道である。長尾街道とともに堺と河内国とを結ぶ主要な交通路であった。

(3) 絵図表現の再検討

御陣図には黒線（川）と朱線（道）だけでなく，長方形の記号が描かれている。合計7つ確認できるこの記号は，川を跨ぎ，道と道とを結び付けるように描かれている。

『地名大系』における御陣図の解説では，「淀川河畔の「森口」（守口）から南へ「十七ケ所」・「若井」を結ぶ太い線は橋らしい記号があるので、旧大和川の水路であろう」と記されている。すなわち，この長方形の記号を橋と推測している。川と道との位置関係を考えれば，妥当な見解に思われる。

しかし，この長方形の記号は本当に橋を表現したものなのであろうか。筆者はこれを橋と考えたとき，次のような点に疑問を抱く。

まず，長方形の記号は河内国の中央部から北側にしか描かれておらず，なぜ南側には見られないのかという点である。例えば長尾街道と龍田道とが接続する「コウ」辺りの表現は，朱線と黒線が交差するだけで，長方形の記号はない。竹内街道についても同様で，「誉田」の南側で朱線と黒線が交差しているに過ぎない。南河内地域の主要交通路であるこれらの道筋に「橋」が描かれていないという点に疑問を感じる。

また，長方形の記号が描かれている河内国北部は，往古にはいわゆる河内湖，河内湾が広がっており，この当時も低湿な地理的条件下にあった。すなわち，深野池や新開池，幾筋にも分かれる旧大和川水系などのため，当時の河内国北部は低湿地帯が続いていた。このような不安定な土地状況において，絵図に描かれるような安定した橋を架けることが可能だったのであろうか。

ここで，奈良興福寺一条院の坊官である二条宴乗が記した日記『二条宴乗記』を紹介し，16世紀後半の奈良と大坂とを結ぶ交通路について考察した仁木氏の研究を参照したい[37]。仁木氏によれば，奈良から大坂に至る交通路は，次の三つのルートが確認できるという。

①「とゝ越」（奈良〜「とゝ越」〜中垣内（大東市)〜〈舟運〉〜大坂）

②暗越（奈良〜(矢田（大和郡山市))〜生馬（生駒市）〜暗峠〜松原（東大阪市)〜森（大阪市中央区)〜大坂）

③「大タウ越」（奈良〜矢田〜「大タウ越」〜若江（東大阪市)〜大坂）

①に見える中垣内は，「御陣図」にある「野崎」の南約2km辺りの地名である。ここから西の大坂方面に向かうには，舟運が利用されていたようである。仁木氏が紹介している『二条宴乗記』永禄13年（1570）正月27日と28日の記事には次のようにある。

廿七日　天晴。暁、雪少降了。大坂へ越。（中略）大坂へ罷越。（中略）とゝ越，中かいと（垣内）へ八過程ニ罷付。風、事外吹間、□のかよひならす候。西風間、舟不出也。中カキト（垣内）ニ留。不弁なる事共也。（後略）

廿八日　天晴。早天ニ罷立。（中略）舟ニ乗了。御供田（大東市）にてよこ渡を可取よし申候。

27日は西風のため舟に乗ることができなかったと

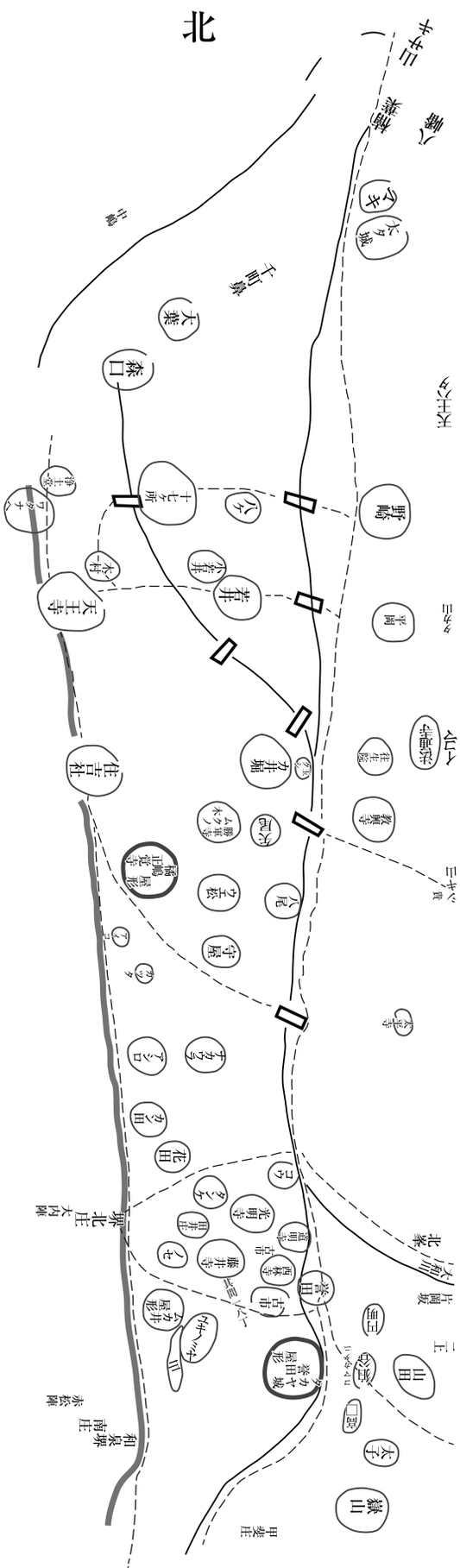
あるが，これは裏を返せば，舟が出なければ大坂方面へ進めなかったということでもある。また 28 日の記事には，舟に乗ったこと，現在の大東市御供田辺りで「よこ渡」を取ったとある。当該期において，御供田一帯には深野池が広がっており，ほぼ同時期のフロイス『日本史』にも，深野池に多数の「独木舟」や「小船」が存在していたことが記されている[38]。

さらに，近世の事例ではあるが，大和川水系には剣先船と呼ばれる川船が存在した[39]。この剣先船の内，賃積み稼ぎを行ったものを古剣先船および新剣先船というが，一方で在郷剣先船と呼ばれたものは村用や渡舟に用いられた。古剣先船と在郷剣先船については，中世から存在したという見方がある。元禄 5 年（1692）段階で，在郷剣先船の元船株所持の村は 23 ヶ村，船数の合計は 73 艘であったことが確認できるが，注目すべきは船株を有する村が若江・河内・茨田・讃良の 4 郡に限られていることである。この 4 郡は「御陣図」の長方形の記号が描かれている地域と概ね一致している。

以上，『二条宴乗記』に見える「よこ渡」，深野池に存在した多数の船，近世大和川水系で使用された在郷剣先船の存在を踏まえると，「御陣図」にみられる長方形の記号は渡し場や渡舟を表しているという見方もできるのではないだろうか。そして，このように仮定した場合，中世後期の河内国中部から北部にかけては，その地理的状況下において，渡舟をはじめとする数多くの川船が，大和川水系に関わる交通を主に担っていたことを指摘できるのではないだろうか。「御陣図」の作成者は，これら川船の存在を念頭に置きつつ，主要な道と交差する地点の情報を重視して長方形の記号を描いたのではだろうか。

ただし，注意しておかなければならないのは，長方形の記号を渡し場や渡舟を意味すると即断することは現段階ではできないという点である。すなわち，筆者は橋が架けられていなかったことを証明する素材を持ち合わせていない。また，大和川水系に存在した川船を示す史料も限られており，近世の交通状況を踏まえた見解がどこまで遡れるのか疑問でもある。

したがって，本稿では長方形の記号が渡し場や渡舟を意味しているという可能性を指摘するにとどめる。今後，この点に関わる同時代の紀行文など，他史料を探し求め，より詳細な検討を加えていく必要があると考えている。



おわりに

本稿では「明応二年御陣図」をもとに，河内国を中

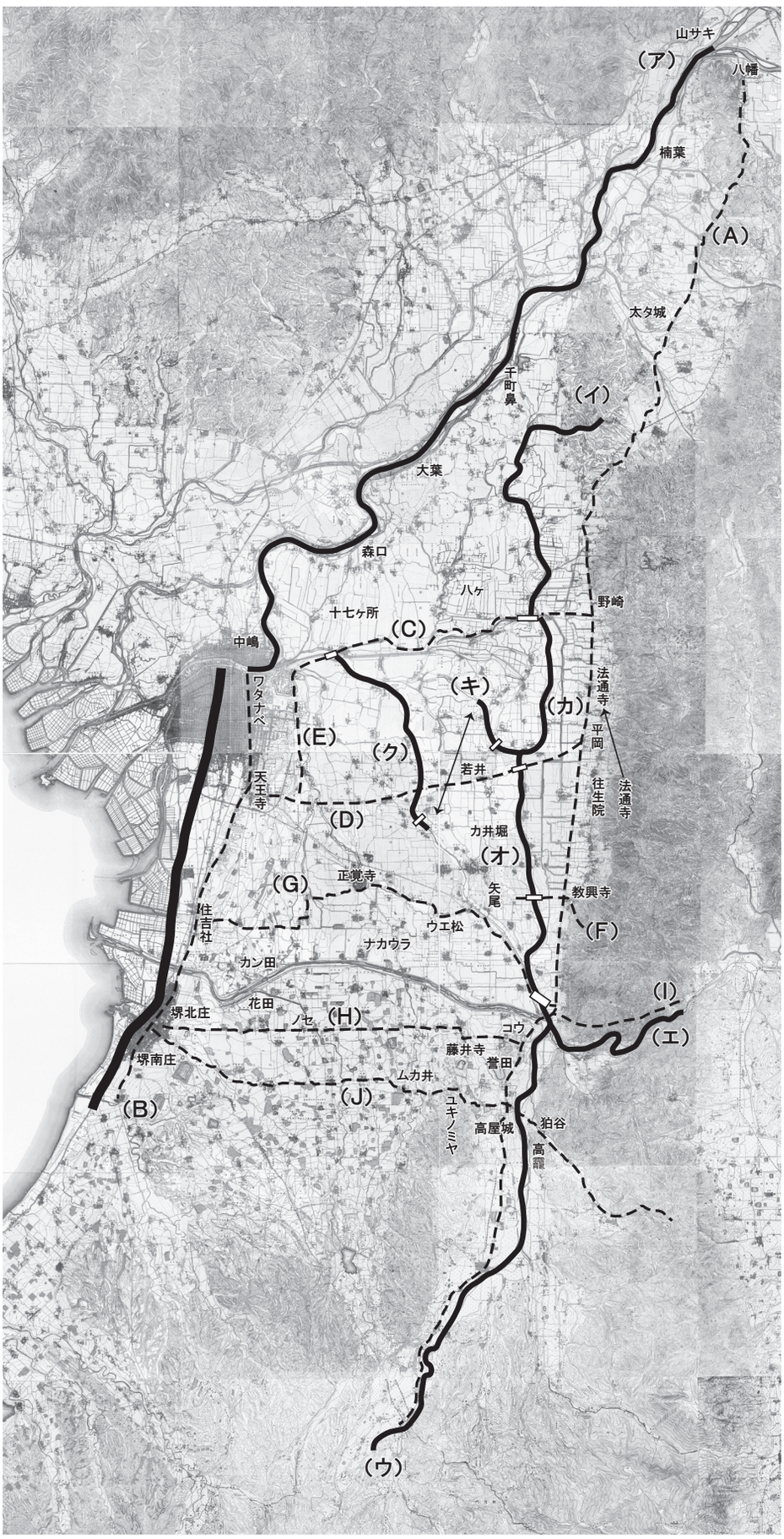


図 3 「明応二年御陣図」の現在地比定

心に地名比定と交通路（川と道など）に関する検討を行った。ここでは，本論のまとめにかえて，検討をする中で分かってきた「御陣図」の性格について述べておく。

一点目は，「御陣図」作成者はやはり尋尊で間違いなさそうなことである。本稿では正覚寺の戦いについて，『尋尊大僧正記』からその経過をみてきたが，その記事に登場する地名と「御陣図」の地名とは一致率が高い。また，「御陣図」の筆跡と尋尊の筆跡とは同一と考えてよいと考えられる[40]。尋尊自身が「御陣図」を描いた蓋然性は高いと思われる。

二点目として，その情報源に関する特徴をあげておきたい。「御陣図」において摂津国住吉郡近辺はカタカナで表記されている特徴を先述したが，これは地名の「音」しか伝わっていないことを意味する。

一方，旧大和川の描写に誤りがあり，また顕著な地形上の特徴である深野池・新開池を描かないなど，中河内・北河内の情報量が貧弱であるようだ。15 世紀末の当時は，奈良と河内・堺方面を結ぶ主要道は長尾街道（H）・竹内街道（J）であったため，この方面の地理情報は伝わっていたが，同じ河内国でも北部はあまり知らなかったようである。16 世紀後半以降，大坂（本願寺寺内）の発展にしたがい，生駒山付近を越える奈良との直線的な交通路が整備されるが，それ以前の

情報の伝わり方を表現しているともいえよう。

こうした表記の粗密は，各所からそれぞれ異なる情報が伝えられていたことによるのではないだろうか。

三点目は，「御陣図」は正覚寺の戦いだけを描いたものではないということである。例えば「千町鼻」や「大葉」は，この戦いには直接関係しないが，これ以前に両畠山氏の合戦の舞台となった土地である。すなわち，「御陣図」はこれまでの両畠山氏の抗争についてまとめた，あるいは由緒を書き表したような絵図なのではないだろうか。

「御陣図」に描かれた情報だけでなく，描かれていない情報もふくめて分析することで，この絵図の成り立ちを解明し，さらには当該期の河内国における交通状況など，多くの情報を読み取ることができる。他種の史料ともつきあわせることで，引き続きこの絵図を活かした研究を進めていきたい。

表 「明応二年御陣図」の地名

翻刻	比定地	現在地	備考
山サキ	山城国乙訓郡大山崎	京都府乙訓郡大山崎町字大山崎	府史に掲載なし
八幡	山城国綴喜郡石清水八幡宮	京都府八幡市八幡高坊	
楠葉	河内国交野郡楠葉牧（郷）	枚方市楠葉一帯	
マキ	河内国交野郡牧郷	枚方市舟橋・招堤など	
太タ城	河内国交野郡犬田城	枚方市印田町	
中嶋	摂津国西成郡中島	大阪市北区・淀川区一帯	
千町鼻	河内国茨田郡千町鼻	寝屋川市太間町	
大葉	河内国茨田郡大庭	守口市大庭町	
森口	河内国茨田郡森口城	守口市土居町周辺	守口市浜町とする説もあり
天王ハタ	山城国綴喜郡天王畑城	京都府京田辺市字天王	
野崎	河内国讃良郡野崎城	大東市野崎	
八ヶ	河内国茨田郡八箇所	門真市・大東市西部・大阪市鶴見区東部	
十七ヶ所	河内国茨田郡十七箇所	大阪市城東区野江など	絵図が示すのは榎並城ヵ
浄土堂	摂津国西成郡浄土堂	大阪市中央区石町	
ワタナヘ	摂津国西成郡渡辺津	大阪市中央区北浜東	
タカ山	大和国添下郡高山城	奈良県生駒市高山町	
平岡	河内国河内郡平岡神社	東大阪市出雲井町	
若井	河内国若江郡若江城	東大阪市若江南町	
小若井	河内国若江郡小若江	東大阪市小若江一帯	
木村	摂津国東成郡木村（木野村）	大阪市生野区鶴橋一帯	
天王寺	摂津国東成郡天王寺城／四天王寺	大阪市天王寺区四天王寺周辺	
イコマ	生駒山	奈良県生駒菜畑町	
法通寺	河内国河内郡法通寺（庄）	東大阪市石切町	御陣図の位置は不正確
往生院	河内国河内郡往生院城	東大阪市六万寺町	
玉クシ	河内国河内郡玉櫛庄	東大阪市玉串元町一帯	
カ井堀	河内国若江郡萱振	八尾市萱振町	寺内町・環濠
住吉社	摂津国住吉郡住吉社	大阪市住吉区住吉	仮名文字に上書きヵ
シキ山	信貴山	奈良県生駒郡平群町大字信貴山	「信貴」に上書きヵ
教興寺	河内国高安郡教興寺	八尾市教興寺	
矢尾	河内国若江郡（八尾城）	八尾市南本町・高美町・安中町など	

勝軍寺	河内国渋川郡大聖勝軍寺	八尾市太子堂	「ムクノ木」とあり
八尾	河内国若江郡	八尾市刑部周辺ヵ	詳細は不明
ウエ松	河内国渋川郡植松	八尾市植松町一帯	
守屋	河内国渋川郡物部守屋の墓・鏑矢塚等	八尾市太子堂	
橘嶋正覚寺	河内国渋川郡正覚寺城	大阪市平野区加美正覚寺	「屋形」とあり
太平寺	河内国大県郡太平寺（智識寺）	柏原市太平寺	
アイコ	摂津国住吉郡我孫子	大阪市住吉区我孫子一帯	
カツタ	摂津国住吉郡勝間（近世は西成郡）	大阪市西成区玉出など	「カツマ」の誤記ヵ／「勝間」は「コツマ」と読む
ナカウラ	河内国丹北郡長原	大阪市平野区長吉長原一帯	
アシロ	摂津国住吉郡	大阪市住吉区	「網代」の意味ヵ
カン田	摂津国住吉郡苅田	大阪市住吉区苅田	
花田	摂津国住吉郡・河内国八上郡花田	堺市北区北花田町・南花田町など	
北峯	大和川の北峯	—	
大和川	大和川	—	
片岡坂	大和国葛下郡送迎山城	奈良県香芝市今泉	送迎山城に通じる道ヵ
コウ	河内国志紀郡国府	藤井寺市国府	
光明寺	（河内国志紀郡）	—	現地比定はできず
タンケ	河内国丹南郡丹下城（大塚山古墳）	羽曳野市南恵我之荘・松原市西大塚	
道明寺	河内国志紀郡道明寺（天満宮）	藤井寺市道明寺	
誉田	河内国古市郡誉田城	羽曳野市誉田	茶山遺跡(誉田7丁目)が有力
古市	河内国古市郡古市（北側の集落）	羽曳野市古市	○囲なし
西林寺	河内国古市郡西琳寺	羽曳野市古市	西琳寺
○古市	河内国古市郡古市（南側の集落）	羽曳野市古市	○囲あり
其間十八丁			古市とユキノミヤの距離ヵ
藤井寺	河内国丹南郡藤井寺城	藤井寺市藤井寺	葛井寺を城郭として用いたヵ
田井庄	河内国丹北郡田井庄	松原市田井城	
ノセ	河内国丹北郡布忍	松原市北新町	
堺北庄	摂津国住吉郡堺北庄	堺市堺区の北側	「大内陣」とあり
タカヤ城			「誉田屋形」とあり
ユキノミヤ	河内国古市郡伊岐宮（白鳥神社）	羽曳野市軽里(峰塚古墳)	現在羽曳野市古市に遷座
山	羽曳野丘陵	—	
ムカ井	河内国丹南郡向野	羽曳野市南恵我之荘	「屋形」とあり／字嶋城ヵ
二上	河内国石川郡二上山	南河内郡太子町大字山田	二上山城ヵ
円明	河内国安宿郡円明	柏原市円明町・玉手町	
山田	河内国石川郡山田庄	南河内郡太子町大字山田	
狛谷	河内国安宿郡駒ヶ谷	羽曳野市駒ヶ谷	「コマカタニ」のルビあり
高□	河内国石川郡大祁於賀美神社	羽曳野市大黒	「高麗」神社ヵ
太子	河内国石川郡太子	南河内郡太子町大字太子	叡福寺ヵ
嶽山	河内国石川郡嶽山城	富田林市龍泉	
甲斐庄	河内国錦部郡甲斐庄（甲斐伏見庄）	河内長野市天見近辺	
和泉堺南庄	和泉国大鳥郡堺南庄	堺市堺区の南側	「赤松陣」とあり

【注】
1．［花園大学福智院家文書研究会 1979］においてこの「明応二年御陣図」の名称を用いている。なお，カラーの写真は［市史編纂委員会・編集委員会 2019］の巻頭に掲載されているので参照されたい。
2．1 に同じ。
3．「御陣図」のトレース図を掲載している主な自治体史としては，［大阪府史編集委員会 1981］，［羽曳野市史編纂委員会 1981］，［新修大阪市史編纂委員会 1988］などがあげられる。
4．［仁木 2005］
5．4 に同じ。
6．1 章の記述は，［山田 2009］や［池 2009］を参照した。
7．『尋尊大僧正記』明応二年二月十八日条
8．『尋尊大僧正記』明応二年三月一日条
9．8 に同じ。
10．『尋尊大僧正記』明応二年三月十五日条
11．『尋尊大僧正記』明応二年三月十七日条
12．『尋尊大僧正記』明応二年三月廿二日条
13．『尋尊大僧正記』明応二年三月廿五日条
14．『尋尊大僧正記』明応二年四月一日条
15．『大乗院日記目録』明応二年三月廿六日条，『蔭涼軒日録』明応二年四月三日条
16．14 に同じ。
17．『尋尊大僧正記』明応二年三月廿一日条
18．『尋尊大僧正記』明応二年四月卅日条
19．『尋尊大僧正記』明応二年閏四月十一日条
20．『尋尊大僧正記』明応二年閏四月十五日条
21．『尋尊大僧正記』明応二年閏四月十九日条
22．『尋尊大僧正記』明応二年閏四月廿三日条
23．21 に同じ。
24．『尋尊大僧正記』明応二年閏四月廿二日条，なお「十七个所」とは淀川中下流域左岸一帯に位置した室町幕府料所の荘園群の総称である。
25．『尋尊大僧正記』明応二年閏四月廿五日条
26．『尋尊大僧正記』明応二年三月六日条
27．［下村晴文 1985］
28．土屋宗直軍忠状「土屋文書」［市史編纂委員会・編集委員会 2019］
29．安満法橋了願軍忠状「紀伊続風土記附録」『大日本史料』［市史編纂委員会・編集委員会 2019］
30．8 に同じ。
31．［仁木 2005］
32．［大阪府史編集委員会 1981］第五章「戦国時代の明暗」第一節「守護家の角逐」
33．『蔭涼軒日録』明応二年三月二日条
34．『後法興院記』明応二年閏四月十一日条
35．［柏原市編纂委員会 1975］
36．元禄十五年摂津国絵図および同年河内国絵図を参照した。
37．［仁木 1997］
38．［松田・川崎（訳）2000］第十四章
39．在郷剣先船に関する記述は，［安岡・石川 1985］を参照した。
40．「御陣図」の筆跡と尋尊の筆跡とが近しいという見解は，末柄豊氏より御教示いただいた。

【引用・参考文献】
池享『戦国大名と一揆』（吉川弘文館，2009 年）
新修大阪市史編纂委員会『新修大阪市史　第二巻』（大阪市，1988 年）
大阪府史編集委員会『大阪府史 第三巻 中世編Ⅰ』（大阪府，1979 年）
同上『大阪府史 第四巻 中世編Ⅱ』（大阪府，1981 年）
大澤研一『戦国・織豊期大坂の都市史的研究』（思文閣出版，2019 年）
市史編纂委員会・編集委員会『新版 八尾市史 古代・中世編』（八尾市，2019 年）
柏原市編纂委員会『柏原市史 第四巻 史料編（Ⅰ）』（柏原市役所，1975 年）
下村晴文『法通寺』（財団法人東大阪市文化財協会，1985 年）
城郭談話会『図解 近畿の城郭』（戎光祥出版，2014 年）
同上『図解 近畿の城郭Ⅱ』（戎光祥出版，2015 年）
同上『図解 近畿の城郭Ⅲ』（戎光祥出版，2016 年）
同上『図解 近畿の城郭Ⅳ』（戎光祥出版，2017 年）
同上『図解 近畿の城郭Ⅴ』（戎光祥出版，2018 年）
中田佳子「戦国の城・河内高屋城」（井上薫『大阪の歴史と文化』，和泉書院，1994 年）
仁木宏「『二条宴乗記』に見える大坂石山寺内町とその周辺―「石山合戦」開戦時を中心に―」（『人文研究』（大阪市立大学文学部紀要）第 49 巻第 6 分冊，1997 年）
同上「摂津国渡辺津をめぐる一考察」（大阪市立大学大学院文学研究科プロジェクト研究会『都市大阪の古代から現代』，2005 年）
同上「戦国時代摂津・河内の都市と交通―中核都市・大阪論―」（榮原永遠男・仁木宏『難波宮から大坂へ』，和泉書院，2006 年）
花園大学福智院家文書研究会『福智院家文書』（花園大学，1979 年）
羽曳野市史編纂委員会『羽曳野市史 第 4 巻 史料編 2』（羽曳野市，1981 年）
同上『羽曳野市史 史料編別巻 羽曳野の古絵図と歴史的地理』（羽曳野市，1985 年）
同上『羽曳野市史 第 1 巻 本文編 1』（羽曳野市，1998 年）
平凡社地方資料センター『京都府の地名』（平凡社，1981 年）
同上『奈良県の地名』（平凡社，1981 年）
同上『大阪府の地名』Ⅰ・Ⅱ（平凡社，1986 年）
松田毅一・川崎桃太（訳）『完訳フロイス日本史 1　織田信長編』（中公文庫，2000 年）
安岡重明・石川健次郎（共同執筆）「2 大和川・平野川と川船」（大阪府史編集委員会『大阪府史』，大阪府，1985）
安村俊史『大和川の歴史―土地に刻まれた記憶―』（清文堂出版，2020 年）
山田邦明『室町の平和』（吉川弘文館，2009 年）
弓倉弘年「河内王国の問題点」（小谷利明・弓倉弘年（編）『南近畿の戦国時代 躍動する武士・寺社・民衆』，戎光祥出版，2017）

【謝辞】
本稿の執筆にあたり，東京大学史料編纂所において「明応二年御陣図」を閲覧する機会に恵まれた。修復中の御陣図の閲覧を許可していただいた所蔵者の方，閲覧の対応をしていただいた東京大学史料編纂所の末柄豊氏，これまでの調査の状況をご教示いただいた京都大学の上島享氏に厚くお礼申し上げる。

（大阪市立大学大学院文学研究科 大学院生）
【2020 年 8 月 28 日受付／2020 年 11 月 6 日受理】

Kawachi Country in the Latter Half of the Middle Ages as Seen from “Meio-Ninen-Gojinnzu”

Hiroshi MIHARA

In this paper, I have examined “Meio-Ninen-Gojinzu”. This drawing was introduced to Fukuchiin family in Nara City and is currently owned by an individual in Kyoto City. It was a drawing about “Battle of Shokakuji Temple” (the Hatakeyama family’s internal conflict) in Meio 2 (1493), and it is known as a valuable historical object depicting settlements, rivers, roads, etc. in Kawachi country in the Middle Ages. In addition, the creator of the drawing is said to be Jinson, a monk of Kofukuji Daijoin.

I transcribed the characters in the picture, that is, the place name, and determined the current places for the place names and the traffic routes. For many place names, I was able to determine the reprint and the current location. Furthermore, I pointed out that a rectangular sign, which was previously considered a bridge, could be a crossing point or a ferry.

From some examinations in this paper, it was found that “Meio-Ninen-Gojinzu” was most likely created by a person who was close to Jinson. Also, this picture is not just a picture of the “Battle of Shokakuji Temple”, but also contains infomations about the Hatakeyama family’s history of internal conflict.

Keywords：Meio-Ninen-Gojinnzu, Kawachi country, Hatakeyama family, Battle of Shokakuji Temple, traffic route